

## 国際協力特別賞

### 壁をノックする

鎌倉市立深沢中学校 2年

壽 優芽

「韓国に引っ越すことになった。」

小学一年生だった秋、父はこう言いました。転勤することになったのです。突然のことで、ただただ泣き喚くことしかできなかったことを憶えています。今思うと、友人と離れるということよりも、外国という未知の世界に足を踏み入れることが、怖かったんだと思います。しかも、日本と韓国はあまり関係が良好じゃないということを母から教えられ、不安が募る一方でした。

しかし、百聞は一見に如かずとはこのことです。韓国の人達は、老若男女にかかわらず、とても優しい人ばかりでした。

地下鉄で、お年寄りの方が子どもの私に席を譲ってくれたり、マートのおじさん、お姉さんも、韓国語が聞きとれない私に、指を使って値段を教えてくださいました。また、習い事でやっていた水泳のスクールでは、先生や生徒の子が体を使ったり、一緒にペースを合わせて泳いでくれたりしてくれて、泳ぎ方を教えてくださいました。

韓国の生活に慣れ、少しずつ会話ができるようになった時には、

「オモ ハングンマルル チャレヨ（あら、韓国語がお上手ですね。）」

などと褒めてもらい、嬉しくて、嬉しくて仕方がなかったです。

そして、いざ日本に本帰国するとなった時は、帰りたくないと言き喚きました。韓国に引っ越す前の私には、想像もつかなかったことです。

国という壁は、とても高くて頑丈です。だから、その国の人がどういうことを考えているのかが見えず、怖いと思うこともあると思います。しかし、それによって流れる不確かな情報を信じてはいけません。勇気を持って、その壁をノックしてみることが大切なのです。そうすれば、自ずとその国のことが見えてきます。文化や食事などを知り、その国の人々の考え方を知り、いつのまにかその国が大好きになっているのです。

壁をノックすることは、バスや電車の席をお年寄りに譲ったり、困っている人を助けるために声をかけることと同じで、簡単なようで難しいことです。

でも、もし世界の人々が外国に対する偏見を捨て、勇気を出して国という壁をノックすることができれば、そこには平和な世界が広がっていると私は思います。